悠・遊・友、そして意宇
“志人道”を生きる

ゆう科学通信

Vol.15
Nov. 11月
2015年11月6日発行

発行：八雲志人館
〒690-2102
島根県松江市八雲町東岩坂3442-9
電話・FAX 0852-54-1023
E-mail／shijinkan@bell.ocn.ne.jp

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム
「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な地域を創出することをめざして活動します。

「悠久の河」意宇川紀行 ④

『意宇六社めぐり』 神魂神社と正林寺

意宇（いう）平野の西の奥に鎮座する「神魂神社」（松江市大庭町）。「神魂」はカモスと読みますが、普通、とてもこのように読めません。「大庭の大宮さん」として親しまれ、「意宇六社」の筆頭にあげられる古社ですが、733年に編まれた『出雲国風土記』にも、927年にまとめられた全国の神社一覧である『延喜式』神名帳にも載っていません。

本殿の天井には、五色の瑞雲が「八雲立つ」よりひとつ多い9つ描かれているそうです。出雲大社本殿の天井には7つが描かれており、出雲大社からここに飛んできたのか？　ここから出雲大社に飛ぼうとしているのか？　いろいろと謎の多い神社です。

◇神魂神社

社名について、神霊の鎮まり坐（ま）す所の「神坐所」（カミマスドコロ）がカンマス、さらに転訛してカモスになったという説が、由緒記に書かれています。

『古事記』に、天地開闢（かいびゃく）の時の造化の三神の一柱としてカムムスヒ（神産巣日）が出てきます。『出雲国風土記』では当社と同じ字の「神魂」（カムムスヒ）として登場し、出雲の神々の母ともいわれています。このカムムスヒがカモスという発音になったということも考えられます。古代朝鮮の天孫降臨神話に出てくる、高句麗王の始祖・ケモス（ヘモス・カモス）神との関連を指摘する説もあります。

神魂神社の本殿と拝殿

諸説あるところですが、由緒記には「悠久な神代時代の事は判然とは窺い知ることは出来ない」とあります。

当社は、アメノホヒノミコト（天穂日命）が創建したと伝えられています。「国譲り」のための第一陣としてオクニヌシのもとに派遣されたアマテラスの第二子で、出雲大社の宮司である出雲国造家の祖先とされています。

主祭神はイザナミノミコトです。716年（霊亀2年）まで、出雲国造が祭主を務めていたといい、国造家の私的な斎場であったともいわれています。現在は出雲大社で行われている出雲国造の代替わりの際の火継式や、毎年の古伝新嘗祭も、明治維新まで、この神社で行われていました。今でも、これらの神事の時には、出雲大社の宮司が必ず神魂神社に参向するそうです。

1891年（明治24年）、当社にお参りしたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、『知られぬ日本の面影』の中で、参道に建っている大石灯籠を「どうしてこれがうまく釣合を保って据っていたものか、想像もつかないほどの大きな岩を、いくつも積んでこしらえてある」と紹介しています。

大石灯籠

この石灯籠と御手洗（みたらい）の脇から、苔むした巨石を積み上げた急な石段を登ると、すぐ目の前に拝殿があります。拝殿の脇に回り込むと、床の高さが目につく本殿がそびえており、荘厳さに圧倒されます。社伝に「出雲大社が創建される時、当社の倍率で設計された」とあるそうです。1948年（昭和23年）の修理の際に、柱から室町時代初期の正平元年（1346年）の墨書が見つかっていますが、現在の社殿は、安土桃山時代の1583年（天正11年）に再建されたものと推定されています。現存する最古の大社造りとして、国宝に指定されています。

社務所脇には御釜宮があり、鉄の大釜が安置されています。これは、アメノホヒノミコトが高天原から降臨された時乗ってきたと伝えられるものです。毎年12月13日に、出雲大社の宮司も参向して「お釜神事」が行われています。

鉄の大釜

ハーンは、「この大庭のあたりには、セキレイがたくさんいる…このへんでは…この鳥だけは害を加えたり、おどかしたりしない。鳥の方でも、大庭の人たちのことは少しもこわがらない」と、セキレイを神鳥として紹介しています。『日本書紀』異伝に、国産みの祖であるイザナギとイザナミが、セキレイが尾を上下に振る動作を見て「愛の技術を学ばれた」（ハーンの表現）とあります。社務所でたずねると、今でも神鳥として尊ばれているとのことです。意宇平野では、小鳥さえも悠久の時を翔（か）けてきたように見えてきます。

◇正林寺

神魂神社から300mほど北西に歩いたところに、十一面観世音菩薩を本尊とする、曹洞宗の正林寺があります。

八雲立つ出雲の水の偉人・周藤彌兵衛翁の菩提寺です。彌兵衛翁は1713年（正徳3年）に、この寺で出家得度（仏門に入ること）し、法号・良刹（りょうさつ）を名のります。時に62歳。

2013年に本堂と位牌堂が改築されているため、真新しいお寺に見えますが、天台宗寺院としての創建は8世紀初めにさかのぼるとされています。奇しくも神魂神社が再建された1583年（天正11年）に、曹洞宗に改宗したと伝わっています。

正林寺の五輪塔群

境内で目を引くのが「出雲国造家五輪塔群」の標柱です。本堂裏の墓地の一角に、代々の国造の墓である五輪塔が並んでいます。正林寺は国造家の菩提寺であったといわれているのです。

神魂神社の鳥居の近くには国造家のお屋敷もあったとされています。798年（延暦17年）に、出雲国造と意宇郡の郡領（律令制での郡の長官）兼務が禁止され、国造家は出雲大社がある杵築に移りましたが、大庭は重要な祭祀場として機能し、明治時代初期までは千家（せんげ）、北島の両国造家の宿館があったとのことです。神魂神社、正林寺と出雲国造家の深いつながりを示すものといえます。

◇八雲立つ風土記の丘

「八雲立つ風土記の丘」広場

神魂神社から700mほど東に「八雲立つ風土記の丘展示学習館」があります。敷地内には岡田山1号古墳があり、ここから出土した「額田部臣」の銘文入太刀や、全国的にも珍しい造形の「見返りの鹿」の埴輪など国の重要文化財が展示されています。今ちょうど企画展「古代出雲文化発祥の地　意宇の開発史」が開催されています（11月15日まで）。

八雲立つ風土記の丘と神魂神社の中間には「出雲かんべの里」があります。この地域一帯が、熊野大社の祭神や、オオクニヌシノミコトを祭っていた人々の居住地として、『出雲国風土記』に「出雲神戸（いずもかんべ）」と記載されていることにちなんで名づけられた施設です。工芸館や民話館、出雲そばが味わえる「かんべ茶屋」などがあり、大人から子どもまで楽しめます。

「出雲かんべの里」遠景

（交易場修）

◇後記

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。

ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。